

令和3年度第2回県立長野図書館協議会議事要録

1 日時

令和4年(2022年)3月2日(水) 午後1時30分～午後3時40分

2 場所

オンライン開催

県立長野図書館3階 信州学び・創造ラボより配信

3 出席者

<委員(五十音順)>

渡邊匡一会長 内山由香里委員 大林晃美委員 春日由紀夫委員

西山卓郎委員 平賀研也委員 松山佳奈子委員

棟田 聖子委員

<県立長野図書館>

森館長 中村副館長兼総務企画課長 永野資料情報課長兼資料係長

北原課長補佐兼総務係長 河野情報係長 篠田企画係長 柳沢専門幹 槌賀主査

朝倉主査 町田主任 横山主事 畔上主事 金子主事 内川主事 永井主事

<長野県教育委員会事務局 文化財・生涯学習課>

春原企画幹兼課長補佐兼総務係長、小澤主査

4 会議次第

(1) 開会

(2) 館長あいさつ

(3) 出席委員並びに職員紹介

(4) 会議事項

ア コロナ禍における県内図書館の運営状況について

イ 県立長野図書館のミッション・ビジョンについて

ウ 協働電子図書館について

エ 令和4年度県立長野図書館の予算について

オ その他

(5) 閉会

5 会議の概要

(1) 館長あいさつ(要旨)

本日はお忙しい中、会議にご出席いただきまして誠にありがとうございます。前回の協議会は7月の半ばでコロナ禍の状況が比較的落ち着いている時期でした。その後年明けから警戒レベルが段階的に上がり、今現在は図書館の利用にも制限がかかっている状況です。初めて図書館の休館をしてから丸二年が経ちますが、公的な施設の開館については、リスク評価と感染対策を行ったうえで社会生活と両立を目指す動きも出てきています。今回の協議会の議題は、全てが関わり合っていますので、説明が長くなって恐縮ですがディスカッションはすべての説明が終えた後にフリーなディスカッションタイムということでご審議いただければと思います。よろしく願いいたします。

(2) コロナ禍における県内図書館の運営状況について

資料1-1、1-2により中村副館長兼総務企画課長から説明

資料1-3により永野資料情報課長兼資料係長から説明

- (3) 県立長野図書館のミッション・ビジョンについて
 資料 2-1 により森館長から説明
 資料 2-2、2-3、2-4 により各課・係の担当から説明
 永野資料情報課長兼資料係長、企画係朝倉主査、資料係槌賀主査
- (4) 協働電子図書館について
 資料 3-1 により森館長から説明
- (5) 令和 4 年度県立長野図書館の予算について
 資料 4-1 により永野資料情報課長兼資料係長から説明
- (6) その他
 生涯学習審議会での話題より森館長から口頭説明
- (7) 委員との主な質疑応答

質 疑	応 答
<p>(平賀委員) コロナ禍での全県の施設の開館状況はともいい資料なので、県立長野図書館から発信されていますか。ウェブ上で発信されたらいいと思いました。 利用状況について、5年くらいの比較を見たいということと、開館しているけれど部分的に 3 階のラボを閉鎖している状況があると思うので、開館日数とは別に開室日数のような統計が取れば付記していただければいいと思いました。</p>	<p>(森館長) 開館状況資料は図書館の間では共有させていただいていますが、ウェブ上で公開はしていないので、何らかの形で公開させていただきたいと思います。 利用状況につきましても、コロナ前後のこととか、改修のために閉館していた時期もありますので、5年くらいのスパンで見たほうが推移がよくわかると思いますので、それも対応させていただきたいと思います。</p>

- (8) 委員との意見交換
 (平賀委員)

着実に言葉にし、仕組みにし、頼もしく素晴らしいなと思った。生涯学習審議会の話はとても大事なことで、そこにつながるものがたくさん今日の資料の中にちりばめられている。ミッション・ビジョンについては、外へ発信していくにあたって、2030 年までのアクションプランとつなげて、どういうポジションでどういうステークホルダーに、どういうファンクションをとというような言語化がされていけば、生涯学習審議会においても、自分たちの試行しているものとすごく重なるということが、整理するだけでわかると思う。例えば、県内の公共図書館というポジションとしては、みんなと対話をしながら新しい図書館を目指していく。あるいは、テーマ別で具体的なプロジェクトを立ち上げてやっていく。デジタルに関しては今回準備なされたものをどういう形にして県民一人一人が参画できるプラットフォームに育てていくのが必要。誰と共に何をなすかというものを是非とも作っていただきたい。

既に実施しているものの中に、その種はもう全部あるといってもいいと思う。資料情報に関して言えば、再組織化をして書庫も整った。でもオンサイトにも展示したり、見せたり、体験したりできるものがたくさんあるので、これらと再組織化した成果をどう見せていくのか。ラボはこういう状況で活用が難しいけれども、図書館に限らず同様のものを作っていく、分かち合っていく場所は県内にたくさんあるので、そういうところとの結びつきを、こういう時期にどう作っていかうかと企画されたらと思う。人材育成支援、研修については、非常に熱心にたくさんの方に参加していただいていると思う。やはり具体的なプロジェクトを一緒にやること、学ぶ場というよりは形にしていくこと、成果を一緒に手にしていくということが大事。研修会も県民も含めたフォーラム、図書館員との研修会、といった中で、具体的なプロジェクトをどうやって作っていかうかと思う。県立図書館だけがやることではない。デジタルについては、もうすぐにできるだけの準備がされていると思った。eLibrary 計画については、リーディングケースを作らなければいけない

と思う。信州ナレッジスクエアの「デジタルコモンズ」について、規約も作れたようなので、いくつかのリーディングプロジェクトを具体的に特定のところと話し合って立ち上げて進めて、こういうことができるということを見せていくのが大事だと思う。例えば伊那ケーブルテレビが戦争の証言の記録をオープンにしたいと考えているプロジェクトがあるが、伊那市立図書館だけでなく県立図書館との共同プロジェクトという形でやってもいい。今、県立美術館で生誕100年の展示を開催している松澤宥に関してアーカイブ化の取り組みもあるので、県立美術館がデジタルコモンズの登録者として参画するとか。そのようなリーディングプロジェクト、モデルケースというものを、是非一緒にやりましょう。また、市誌や県誌の新版が今編纂されようとしているが、これまで作られてきた市誌や県誌をeReadingにする、あるいはそれを年表化するようなことをやったら、面白いと思っている。NIIの高野先生が東京の自由学園の学校誌を作ったが、そこに高野先生の提案で年表がある。そういうものと紐づいて資料が見られると、とても面白いと思うので、是非考えてみたらどうか。電子図書館についてはよくぞ市町村を巻き込んで事業化を果たして、予算もきちっと財源を獲得されて大変なご苦労だったろうなと思った。たぶんPTA母親文庫活動以来、初めて市町村と手を取り合う機会だと思うので、有効に使っていただきたい。他の都道府県立図書館が大変注目している。県立長野図書館のコンソーシアムな電子図書館は他県の図書館からもこれからのデファクトスタンダードとして認識され始めている。これが進むことで出版の人たちの意識にとっても良い方向でのインパクトがあると期待している。全行政が参加したわけだが、全市民が参画できるようにどう持っていくかというのが大切で、すでに取り組もうとしているものをいかにプロジェクトとして見えるようにしていくかというのが何よりも大事だと思う。楽し気にやっている町々や人々を地道に増やすということが何よりも大事。楽しんでやれる、見せられる仕組みがこれでひとおとり揃ったので、頑張ってもらいたい。

(森館長)

一緒にやろうと言ってくれる相手とまず良い事例を作り、それが波及していけばいいのかなと思えるようになってきた。協議会に関わってくださっている皆さまはリーディング事業と一緒にやって頂ける方だと感じている。そのうちのひとつとして、信州ナレッジスクエアの活用のところでは、eReading 信州学のしくみを郷土の副読本に活用しているという話を、松川村の棟田館長さんが進めてくださっている。また、小諸市の大林さんのところで、フォーラムで取り上げた「どこコレ」を実践していただいた。信州ナレッジスクエアのデジタルコモンズに掲載していただける兆しもあるのかなと期待している。そのあたりのところから、今どんな風に考えておられるのか、もし、阻害要因があるとしたらどうすれば進めていけるのか、教えていただけたらと思う。

(棟田委員)

副読本の話について、最初は図書館ではなく、村の教育委員会が小学4~5年生に向けて松川村の歴史や風土を描いた副読本を作ろうとしていた。そのことは、教育委員会で話が出ていたようだが、私は新聞発表で知った。記事の中にいずれはデジタルでの公開を考えていると書いてあったので、それなら、デジタルコモンズに載せられたら、全県民が松川村のことを知ってもらえてすごくいいなと思った。そこで、県立図書館に相談して原稿もできていない状態での話が始まった、原稿を執筆する段階で、入札で決まった出版社に入って頂き、県立図書館とどんな風に進めていけばいいか相談させていただいたという経過である。

信州ナレッジスクエアについて、村の教育委員会の人たちはこんないいものがあるということを知らなかった。図書館の人たちは県立図書館のホームページを見て知っているが、それをもっとみんなが知るような方策に持っていくことが必要と感じた。何かきつ

けがあるときに、あるいは既にいろんな市町村で出来ているものがいっぱいあると思うので、それをどのように県のデジタルコモンズに載せていけるかを宣伝する仕方をもう少し工夫できたら、もっといいものになるのかなと思う。

(平賀委員)

いいですね。松川村で作られて使われているという状況がどんどん皆知るようになれば、先生も親も地域の方たちもそれがわかっていく。それが、松川村だけじゃなくて先生方を通じて広がっていく。みんなに開かれていく。だれが最初に楽しむのかということだと思う。地域の学びや学校での地域学習とかでプラットフォームの提供やコンテンツを作るとか、そのプログラム化の市町村への提供などで具体的になる。2030年までのビジョンにも関連して具体的なプロジェクトがあるってことがすごくいい。

(春日委員)

今、公民館で区誌を作っている。それを、将来的にはデジタルコモンズの方へということで委員の皆さんも非常に喜んで出版社とも話をしている。せっかく区誌を作るので、それに合わせて子供たちに地域の副読本を作りたいという話が出てきて、区誌を小学生向けに編集しなおしてという話もある。最初本を作る話だったが、本を作らずポーンデジタルでという話も出ている。それをこれからのICT教育に活用してもらったらどうかという話が出ている。

先ほど平賀さんから、地域の中で具体的なプロジェクトを決めていく、というような話もあったので、自分でも考えてみた。資料をざっと読ませていただく中で、行動指針の中の「協働します」という部分が公民館のような社会教育の立場からは非常にありがたいなと思った。公民館も参画して進めていけた場合の学校教育とのつながりを感じている。公民館の活動の中でも、積極的に学校の中に踏み込んで、サポートしようという講座も出ている。更にそこに電子図書館が入ってくると教育的にもいいんじゃないかなと感じている。もうひとつ、すべて図書館にお願いするのは難しいかもしれないが、公民館としても取り組んでいきたいことは地域活性化である。地域の活性化を図るという時、今までの発想から言うと、やや消費的なお祭りの感覚で終わってしまうところがある。最初の公民館のスタートにあった地域文化の振興、文化を高めていくとう地道な取り組みが、なかなか取りにくいのが正直なところ。そこに図書館との連携を含め、どうやったら、地域文化を高めていけるのか、そういう取り組みを一緒に考えていけたら面白いと考えている。

(大林委員)

小諸市では、前教育長が以前に副読本を作っていて、そういうものがデジタル化されて見ることができるというのがわかると、意外と「私のところもやりたい」というのが出てくるんじゃないかなと思った。副読本は200円で販売していたが、地域の副読本なので元々は小学校の資料でも、大人が結構買いに来ていた。それが、デジタルで見られるとしたら、需要はあるんじゃないかと思う。「どこコレ」についても、関わらせていただいた。古い時代のことは歴史家の方が調べたりするが、昭和の時代ってスポッと抜けてしまったり、最近のことだからという安心感からなかなか取り上げられないことがある。昭和の時代はいろんなことがあるので、取り上げると反響がある。10代の子も昔の写真を楽しんで見てくれた。来年度も引き続きやりたいと思っている。今度は具体的な地域と一緒に、少しずつ失われつつある昭和の街の姿とかを残していけたら、それを地域ごとにやれたらいいなと思っている。その時はまた相談させていただきたい。

(西山委員)

電子図書館で横串が通って、いろんなところが協働して、すごくいいなと思っている。

先ほど棟田さんが言っていたように、図書館以外の方が図書館のことをわかっていないということのブレイクスルーにもなっていくのではないのかなと思っていて、図書館以外の人を巻き込んでいくのがすごくいいなと思った。是非これをきっかけに、「IDを共通化したらいいのではないか」とか、「まとめられることはまとめたらいいのでは」とかが起きていくとすごく面白いなと個人的に楽しみ。

費用分担のところを見て思ったのが、すべての市町村が入って800万としたら1箇所あたり、10万から20万くらいかと思うが、うちの会社の寄付の仕組みとかも使って、自分たちでもお金を稼いでいくと電子図書館が充実していくようなことも面白いんじゃないかなと思った。是非、私たちも巻き込んでいただきながら、いろんな場所にこのお題目と共に行き働きかけるのもすごく楽しいなとワクワクしている。

(森館長)

電子図書館の、一番狭義のところは電子書籍の貸出サービスの契約ということになるが、広い概念で考えると信州ナレッジスクエアも含めてデジタルで読める本と一緒に作っていくということだと考えている。その時に、例えば経費面では、協働電子図書館に賛同して下さる方からガバメントクラウドファンディングで寄付をいただく、という方向性もあるし、お金をかけるというところではなく、コンテンツと一緒に作るという関わり方もある。関わり方の間口がとても広いと思っている。また、電子図書館の活用面についても、学校教育での活用の可能性や、区誌のような活動とも結びついていく。コンテンツを使っただけで、その成果が蓄積され、循環するという姿になっていけると思うので、ぜひ一緒にやってください。よろしくお願いします。

(渡邊会長)

先日あるNPOの方と別件で本の話をしている時に、生活基本調査の結果について「世帯別に本に触れている時間が全然違うよね」という話が出て、2016年の時点でこのことは結構リアルになっていると思った。これを踏まえても、いろんなところを巻き込んでいって小さなことでも早くにやってみようということがすごく必要なんじゃないかなと思っている。ぜひ巻き込んでください。

(森館長)

電子図書館の話を知事に説明に行った際、知事の問題意識としては、「昔は図書館が情報を蓄積して読める環境を作る必要があったけど、今はお金さえ出せばどんな情報でも手に入る時代に、なぜ図書館がこういうことをしなくてはならないのか」ということだった。「公正な社会づくり」という観点で「ネット時代だからこそ、経済的な理由やさまざまな理由で情報格差は広がっている。学校教育の現場でタブレットなどのハードは整ったが、ソフトの部分での格差が拡大したり、あるいは学校教育を受けられない状況なども生じている。そういう部分にもリーチしていけたら」と伝えた。

財源が市町村と県だけでは、どうしても予算的に優先順位があり、一律のマイナスシリングの中で限界がある。今回、宝くじ助成金をいただけたのは、本当に有難かった。関係者からは「経済的な要因だけでなく、使いたくても使えなかった、学びたくても学べなかった人たちがいるから、みんなの図書館にしていってください」というエールをいただいた。出資して下さる方の思いにも応えられたらと思っている。

誰もが格差なく読書できる環境が豊かになり、出版社にとっても公共図書館向けサービスにコンテンツを提供することがメリットだと思っていただけのような取り組みにしていきたい。渡邊会長から話のあった収入関係と読書の相関関係なども説得力のある資料だと思う。

(平賀委員)

結局今までも、公共図書館もあったし学校図書館もあった、でもそこにアクセスするという行為の格差があった。今回も情報を蓄積する入れ物を作りました。ブラウジングする仕組みも入れました。でもそのままだと実は今までと変わらないと思う。この一連のデジタルシフトが目指したところは、「一人一人がもっと創造的になれるよ、なれる方法があるよ、それに参画できるよ」という、「創る」とか「使う」とかをいかに事業にしていくのが一番大事なのかなと思う。たとえば、長野県のPTA 母親文庫活動も、単に本を提供するというのではなく、本を読んでいる母親や子供の姿をいかに作り出すかという事業だったと思う。「本を増やすこと、本を手にする機会を増やす」ことが最後の目的ではなく、「そういうことが行われている親子の状況や地域の状況をどうつくるか」ということだったと思う。それは今も変わらない。デジタルでも変わらないと思う。なので、ここで是非、「基盤は作りました。さああとは今まで以上にたくさんの人が生き生きと楽しく関わることができるか」というのがチャレンジかなと思う。

(内山委員)

5～6年前、授業の中でビブリオバトルを英語でやってみようと思い、生徒達に本を選んでこうやるんだよと話した時に、高校生たちは本を読んでないということは言われていたので驚かなかったが、家に本がないという生徒が結構いて驚いた。最近買った本じゃなくても小さな頃に読んだ絵本でもいいと伝えたが、それもないと言われて、私としてはそれが結構ショックだったことを今、皆さんの話を聞きながら「そういうことだったのか」と思い出した。アクセスする行為の格差と平賀委員が言われたが、そこに図書館があるだけじゃダメなんだということもすごく感じている。図書館からの事業報告の中で、コロナ禍でいろんなところに行けなくて、県立図書館の児童貸出では需要が増えたとあったが、逆にコロナ禍で疲弊して、困窮して余計に本から遠のいている人たち、子供たちも結構いるのではないかと感じている。その中で、今日電子図書館というのを聞きながらすごく感動している。全部の市町村が参画できること、市町村ごとの温度差に関係なく、お金のあるなしに関係なく、宝くじの助成金のおかげで最初のスタートのところから同じようにアクセスできるということが保障されたというのはすごく嬉しいと思う、市町村が参画して、ひとりひとりが、私達市民がそこに参画できるというのが嬉しい。同じ土俵に立てる準備ができているということワクワクしながら聞いていました。ただ、それがどう届けられるのか、どうみんながちゃんとアクセスできるのかというのが、これからの課題かなと思う。今まで本にアクセスできなかった人たちが一歩でも二歩でも、一人でも二人でも増えていくといいと思う。学校の立場で言うと、一応高校も自己負担ではあるけれども、タブレットを全員持つことで動き出している。ただ、生徒たちの話を聞くと、オンライン授業にもだいぶ慣れてはきたが、ずっと画面を見ていると目が疲れるという。なので、電子書籍もいいけれども、電子書籍からタブレットを入り口にして、リアルな本にも、リアルな体験にもつなげていかなければいけないなと思っている。

(松山委員)

電子書籍の話がすごく進んでいることにびっくりしてワクワクして聞いていたが、小さい子に電子書籍をずっと見せるということは健康的にもどうなのかなと思っていて、今もそのような場合は時間を区切って見せている。実際の本だといくら見ても安心なので、電子書籍をきっかけに実際の本にも触れていけるように、両方のいいところを使っていけるといいと思う。

副読本を電子書籍にという事業はすごくいい。子供も実際の紙よりタブレットに興味が強いので、タブレットで副読本が見られるということが子供にわかると子供たちが家庭に帰ってから親に伝わる。「そういうこともできるのね」ということが親に伝わると、「ま

た別の本を今度は図書館で探してみようね」ということにつながるので、学校で一部の本が好きな子だけじゃなく、全員に伝わるといのはすごくいいなと思った。

(棟田委員)

電子書籍をここまでするにはたくさんの方のご苦労があった。まだ途上ではあるし、今後の課題もたくさんあるけれど、更にこれから選書基準を作っていくというプレッシャーの中にいるのですが、皆さんの言葉が励みになります。私も頑張ります。一緒に頑張りましょう。

(平賀委員)

是非、受け身で読むだけじゃない、子供たちの学びの機会を選書の中でも議論していただけたらいいなと思う。

(渡邊会長)

春日委員さんから公民館の話も出たが、博物館も含めて、なかなか話に乗れないということがあった。先日、戦前の松本を飛行機から撮った16ミリのフィルムが出てきて、「どうしようか」と博物館と話したら「どこにそれを置くか」という話で終わってしまった。どこの館がその資料を持っているのがふさわしいのかという話で終わる。

私は「使わないんですか？見ないんですか？」と思った。今ならナレッジスクエアというものがあるという話になって、デジタルコモンズで使えるというところへ博物館の方はつながらない。置いただけでは誰も見られない。ましてや、16ミリなんて加工しなければ見られない。コストの問題もあるとは思いますが、昔、図書館は博物館の役割を果たしていたところも多く、古い資料を図書館が持っているところもあるが、博物館、公民館でも図書館と一緒にやりたいという人はいるはずだと思っている。図書館はぜひ、博物館や公民館を巻き込んでほしいと思う。

(森館長)

「信州 知の連携フォーラム」の今後について信州大学さんを中心に検討しているので、その中でぜひ考えていきたい。

最後に、事務局から、委員の任期は2年であり、令和4年度の12月までであること、次年度は6月頃に第1回協議会を開催する予定である旨の連絡があった。